

# 一条氏館跡遺跡

1988

山梨県三珠町教育委員会

# 一条氏館跡遺跡

1988

山梨県三珠町教育委員会

## 序

本報告書は、三珠町民文化資料館建設に伴い、昭和62年度に発掘調査された山梨県西八代郡三珠町一条氏館跡遺跡について、その成果をまとめたものです。

現在三珠町では、歌舞伎公園隣接地3,400m<sup>2</sup>に文化資料館を建設中です。そのうち建設面積600m<sup>2</sup>につき、山梨県教育委員会文化課と山梨県埋蔵文化財センターの指導監督のもと全面発掘調査を実施しました。検出された遺構は、主として弥生時代後期の方形周溝墓です。狭い調査区内に6基の方形周溝墓が密集しており、当遺跡は丘陵全面に拡がる墓群の一部分と推察されます。ともあれ、当初予想された中世の一条氏館跡（上野城）の遺構は発見されず、むしろ県教育委員会で発掘を実施した一城林遺跡や、今後発掘調査を予定している上野遺跡（三珠町農村広場内）などとの関連が注目されます。

この度の調査によって、曾根丘陵遺跡の性格解明の緒が得られ、また中世の一条氏館跡はこの遺跡より北方に位置することが推測されます。また、由緒ある大塚古墳群を蓄える三珠町としても、文化財の全容が明らかにされつつあり、その理解が深まり文化の町作りが確立するものと思います。

末筆ながら、ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接発掘調査に当たられた皆様方に改めて厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月

三珠町教育委員会

教育長 小林 君男

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和62年度事業の三珠町民文化資料館建設工事に先立ち、三珠町教育委員会が実施した、三珠町上野字一城林に所在する一条氏館跡遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和62年8月12日から同31日まで行った。整理作業は昭和62年12月1日から昭和63年3月31日まで行った。
3. 調査組織、及び調査参加者は下記の通りである。

調査主体	三珠町教育委員会
調査担当	清水 博（櫛形町教育委員会）
調査員	土橋通貴（三珠町文化財審議会委員）、堀ノ内泉（奈良大学）、土橋美和（都留文科大学）
調査事務	武田智宏（三珠町教育委員会社会教育主事）
作業員	有泉とし子、有泉ゆき、石川洋子、小林治子、塙田 東、塙島富美子、溝 健司、望月光三、森田さつ子、山本まさき（一般） 小林直美（山梨学院短期大学）、塙島光仁（東京農業大学）、土橋延至（足利工業大学）、 山本 忠（山梨大学）、丹沢俊一（市川高校）
4. 本報告書の構成は清水、堀ノ内が協議して行った。遺物の実測、トレース、写真撮影等は堀ノ内と土橋美和が、遺構の写真撮影は堀ノ内が行った。また原稿の執筆者は各文末に記した。
5. 石材は河西学氏（山梨文化財研究所）に鑑定していただいた。
6. 発掘調査から報告書の作成まで、下記の方々のご指導ご助言を頂いた。記して謝意を表する次第である。

櫛形町教育委員会、新津 健（県教育委員会文化課）、森 和敏・田代 孝・末木 健・小林広和・中山義二（県埋蔵文化財センター）、河西 学・鶴原功一（山梨文化財研究所）、白居直之（長野県埋蔵文化財センター）
--
7. 本調査に係る出土品、及び記録図面、写真等は一括して三珠町教育委員会で保管している。

## 凡　　例

1. 挿図縮尺は原則として次の通りである。

遺跡全体図	1/150、方形周溝臺及び溝平面図	1/80、土層断面図及びエレベーション図	1/40、土壤及び置石遺構	1/40、住居址平面図	1/60
-------	-------------------	----------------------	---------------	-------------	------
2. 遺構の記述、挿図について。

遺構実測図の水系レベルは原則として海拔287.500mである。
---------------------------------

上層説明は住居址のものをぞき、すべて統一した。第5図の土層説明を参照されたい。
3. 遺物の記述、挿図について。

スクリーントーンの指示について。
------------------

弥生土器実測図中のものは赤色塗装部位をあらわす。

中世土器実測図中のものはスヌ付着範囲を示す。

土器断面のものは陶器を示す。尚黒色は須恵器を示す。

# 目 次

序  
例 言  
凡 例  
目 次

第Ⅰ章	調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章	遺跡周辺地域の状況	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	4
第Ⅲ章	調査の方法と層位	7
第Ⅳ章	遺構と遺物	8
第1節	弥生時代の遺構	8
第2節	その他の遺構	14
1)	竪穴住居址	14
2)	土 壇	15
3)	置石遺構	16
第3節	出土遺物	16
1)	弥生土器	16
2)	縄文土器	19
3)	その他の時代の土器	22
4)	石 器	22
第Ⅴ章	まとめ	25
	註・参考文献	26

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000) .....	2
第2図 遺跡地形図 (1/2000) .....	3
第3図 遺跡全体図 (1/150) .....	5・6
第4図 基本土層図 (1/80) .....	7
第5図 方形周溝墓 (1・2号) 及び遺物出土状況図 (1/40・1/80) .....	9・10
第6図 方形周溝墓 (3~5号) (1/40・1/80) .....	11・12
第7図 方形周溝墓 (6号) (1/40・1/80) .....	13
第8図 溝状遺構 (1/40・1/80) .....	13
第9図 1号・2号・3号住居址 (1/60) .....	15
第10図 土壙1・2、置石遺構 (1/40) .....	16
第11図 弥生時代の土器 (1/3) .....	17
第12図 繩文時代の土器(1) (1/3) .....	18
第13図 繩文時代の土器(2) (1/3・1/4) .....	20
第14図 その他の時代の土器 (1/2・1/3) .....	21
第15図 石器(1) (1/1) .....	22
第16図 石器(2) (1/3) .....	23
第17図 石器(3) (1/3) .....	24

## 図版目次

図版I 遺跡遠景、調査参加者

図版II 遺跡全景

図版III 1号方形周溝墓及び同遺物出土状況、5号方形周溝墓・土壙2

図版IV 2号方形周溝墓及び同遺物出土状況、3号方形周溝墓・溝状遺構及び置石遺構

図版V 4号方形周溝墓・土壙1、6号方形周溝墓・1号住居址

図版VI 1・2・3号住居址

図版VII 弥生時代の土器、その他の時代の土器、石器

図版VIII 繩文時代の土器

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

三珠町では、昭和62年度事業として三珠町上野字一城林の歌舞伎公園隣接地に町民文化資料館の建設を計画した。ところが当予定地はたまたま一条氏館跡(上野城)として周知の史跡であったため、県教育委員会文化課からの指導もあり発掘調査を実施することとなった。そのため町教育委員会では櫛形町教育委員会の清水博に発掘調査の担当を依頼するとともに、町文化財審議会委員の土橋通貴を中心として発掘調査の準備にはいった。なお、発掘調査にさきだって行った現地踏査によれば、縄文時代前期及び中世の所産と考えられる土器片を採集することができ、該期の遺構の発見の期待がもたらされた。

発掘調査は、資料館建設の工期の関係もあり8月中には完了することとし昭和62年8月12日に発掘を開始した。

調査は発掘区西端から東方に向かって行った。重機による耕作土の排土後、人力によって精査、遺構の掘り下げを行った。中途において1号及び5号方形周溝墓の規模・形状の確認を行うため一部発掘区を拡張したが、調査参加者の熱意、資料館建設業者の協力などにより予定どおり8月31日に調査を完了することができた。また8月24日には都社会教育担当者会の方々のご視察を得、8月29日には町民の皆さんを対象とした現地説明会も開催した。

一方、出土品の整理、報告書の作成等は昭和62年12月1日から昭和63年3月31日まで行った。三珠町教育委員会では発掘調査によって得られた出土品等を保管するとともに、活用していくように考えている。

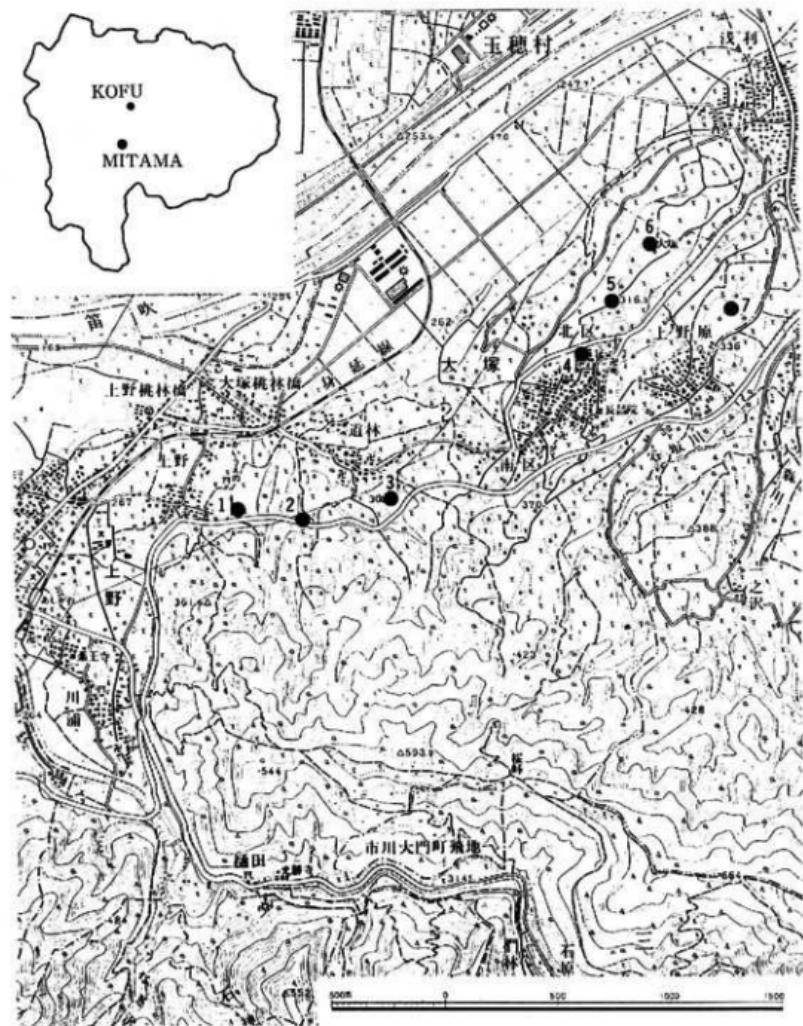
(武田)

## 第Ⅱ章 遺跡周辺地域の状況

### 第1節 地理的環境

一条氏館跡遺跡は西八代郡三珠町上野字一城林に所在する。三珠町はほぼ三角形状を呈する甲府盆地の南西縁にあたり、富士川をさかのぼって甲府盆地に入りわずかに北東へ進んだ位置に存在する。町内は地形的には大きく3つの地区に区分される。丘陵地帯の大塚地区、芦川の扇状地を中心とする上野地区、芦川峡谷に沿った山地の下九一色地区に分けられるが、概して山地がその大部分を占めている。

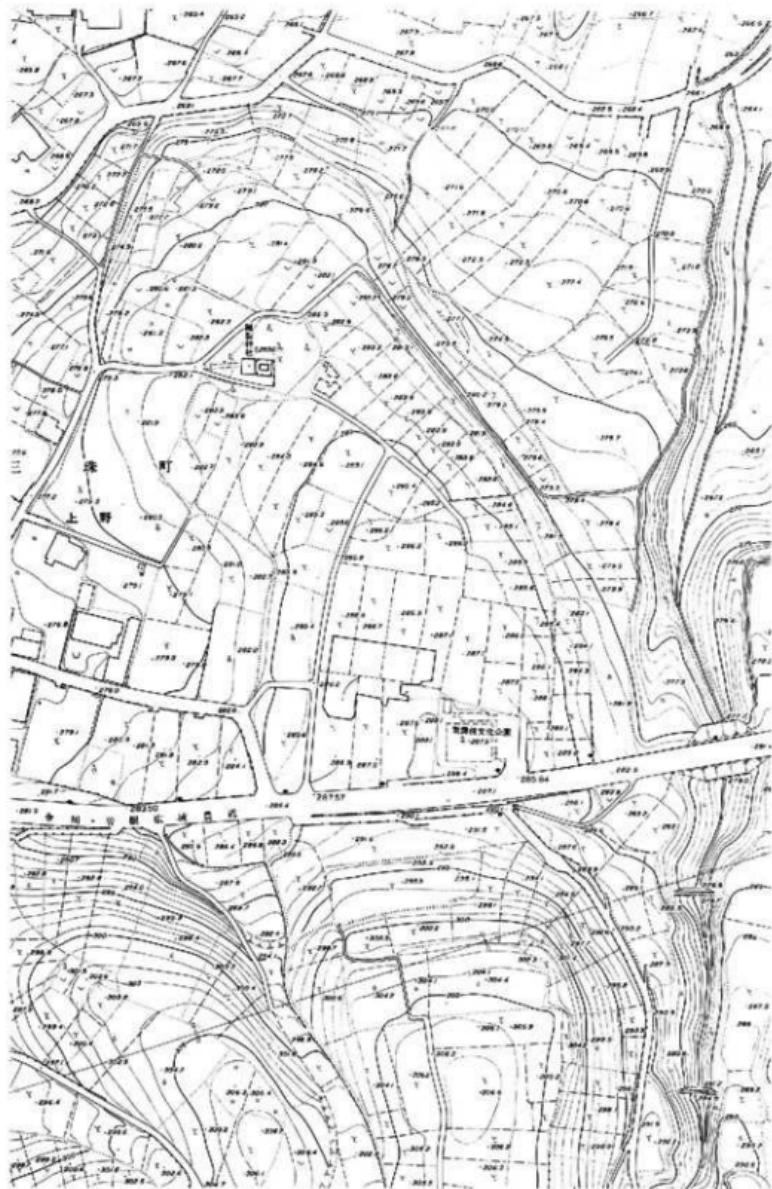
遺跡ののる上野地区的丘陵は、数多くの遺跡や古墳が点在し考古学研究上重要な地である曾根丘陵の南西端に属する。曾根丘陵は甲府盆地南縁に、御坂山地からベンチ状に張り出してもは東西に続いている丘陵である。その標高は300m前後で山地から流れ出る小河川によって幾つかの小台地に開拓され、丘陵下には笛吹川が寄り添うように流れ氾濫原を形成している。



#### 遺跡地名表

- 1. 一条氏館跡遺跡
- 2. 一城林遺跡
- 3. エモン塚遺跡
- 4. 敷石造橋
- 5. 伊勢塚古墳
- 6. 大塚古墳
- 7. 鳥居原狐塚古墳

第1図 居辺遺跡分布図(1/25000)



第2図 遺跡地形図 (1/2000)

本遺跡はこの曾根丘陵の南西端にあたる上野地区の小台地に占地している。この小台地は北西方向に延びる小規模な舌状台地でその標高は280~290mを測り盆地との比高差は40m程を有する。

台地の眼前には甲府盆地が広がり、その北方には八ヶ岳をさらに西方には南アルプスの山々が眺望できる位置にある。

(土橋美和)

## 第2節 歴史的環境

一条氏館跡遺跡の所在する三殊町は甲府盆地の南西部上野地区に位置している。曾根丘陵は、多くの遺跡や古墳が存在し從来から注目されてきたが、町内でもこの曾根丘陵を中心として幾つかの注目すべき遺跡が存在している。以下、これまで調査されてきた遺跡を中心として本遺跡を巡る歴史的環境を概観してみたい。

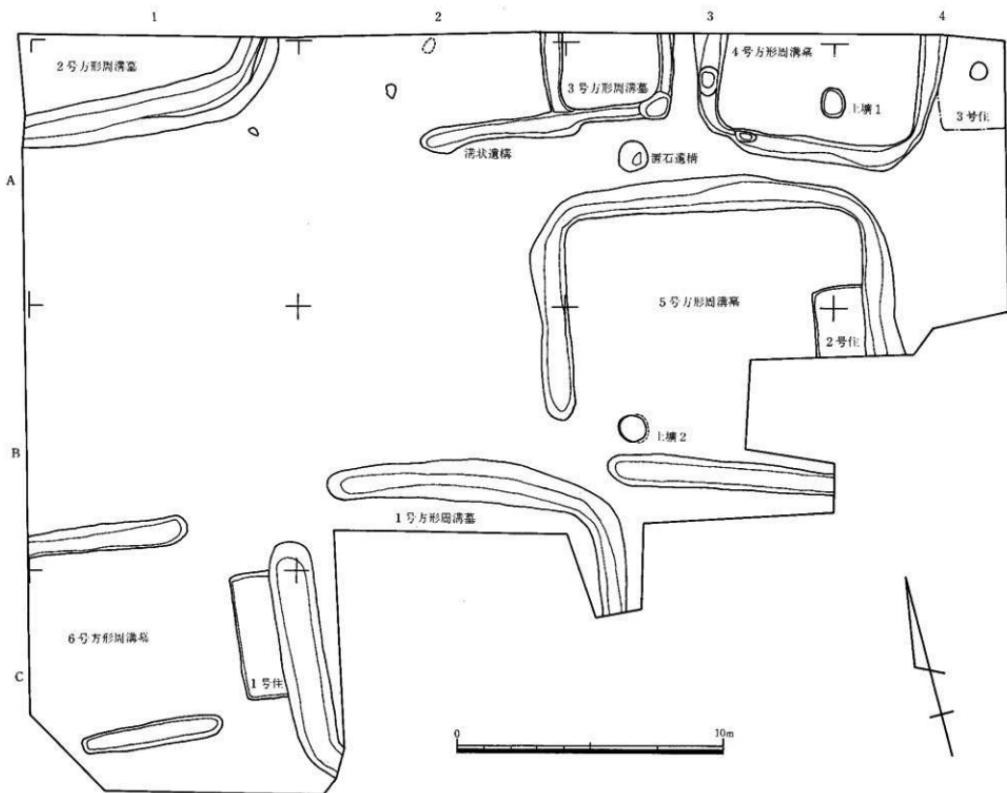
本遺跡ののる舌状台地の先端には武田信玄の弟にあたる一条信竜の居城・上野城があつたと伝えられている蹴裂(けき)神社がある。一条信竜には歌舞伎宗家の初代市川団十郎がつかえていたとされ、本遺跡隣接地には歌舞伎文化公園が造られている。

昭和45~47年にかけて農道整備事業が行われ、丘陵上段、標高370mの地に水谷堀遺跡が確認された。この整備事業に伴ってローム層がカッティングされ、旧石器時代の石器や押型文土器などが検出された。昭和47年には金川曾根広域農道建設に伴って大塚字上野原の上野原遺跡が緊急に調査された。遺物は縄文時代前期末葉から中・後期のものが中心であったが、他に馬の刻線画が施された土師器・蓋の破片も報告されている。さらに大塚西原地区には敷石住居址とみられる遺構④の存在が伝えられているが、現在は茶樹園の一角となり僅かにその様相をとどめているにすぎない。

ついで弥生時代についてみてみると、金川曾根広域農道の建設に伴って昭和53年に調査が行われた一城林遺跡②がある。弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺跡で一条氏館跡遺跡とは谷を一つ隔てた東側に位置し、竪穴式住居址6軒、溝2本等が検出された。尚昭和26年の調査によれば炭化米が発見されている。

古墳時代にはいると、丘陵地帯に前期古墳の分布が認められている。大塚地区には大塚古墳⑥、伊勢塚古墳⑤をはじめとして10数基の古墳が点在している。その中でも特筆すべきものは鳥居原孤塚古墳⑦である。4世紀終末から5世紀初頭の古墳とみられ、赤鳥元年銘鏡などが出土しており学界においても著名である。現在では朱が付着した河原石による葺石の一部を見ることができるが、古墳自体のプランは削平により不明である。

一条氏館跡遺跡は曾根丘陵を東にすんだ中道町の上の半遺跡に続く、この丘陵上に存在する周溝墓群の検出であり、三殊町の歴史をとらえるうえでも貴重な発見であった。(土橋美和)



第3図 遺跡全体図 (1/150)

### 第III章 調査の方法と層位

今回の調査は資料館の建設に伴うもので発掘予定面積はほぼ600m<sup>2</sup>であったが、拡張の結果約700m<sup>2</sup>となった。発掘区は東西40m弱、南北30mで北西隅を“しお”とするL字形を示している。

調査の方法はグリッド法を探った。工事用の基準軸を利用し、発掘区全体に10m方眼のグリッドを設定した。グリッドは東—西方向に西から1～4、南—北方向に北からA～Cとし、例えばA-1区、B-3区と呼称した。

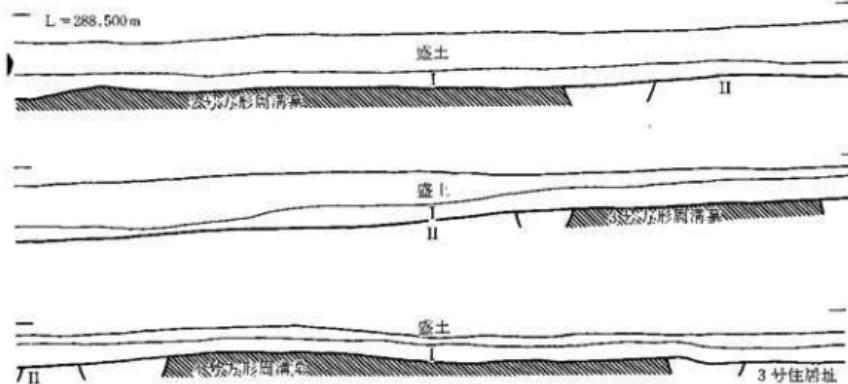
調査は機械力と人力を併用した。重機によって耕作土を排土し、以下を人力で精査し遺構・遺物の検出に努めた。

人力による精査は発掘区西半部から順次東に向かって行った。

本遺跡の基本層は僅かに2層である。第I層が耕作土で厚さ20～30cmを測り、第II層はローム層となっている。本来、第II層上位に存在したと考えられる土層は完全に削平を受けていた。そのため本遺跡では他遺跡に見られるようないわゆる包含層は認められず、また検出された諸遺構における本末の掘り込み面は現状よりもかなり上位になるものであろう。現地踏査時に弥生時代の遺物がほとんど採集しえなかつたのはこのことに因るものとも思われる。

本遺跡にあっては本来の遺構面の削平が著しく、遺構・遺物の遺存状態は良好とはいがたかった。また検出した遺構と発掘面積との関係もあり、遺構全体を完掘したるものもなかった。しかしほぼ半月にわたる調査の結果、6基の方形周溝墓を中心として多くの成果を得ることができた。

(土橋通貢)



第4図 基本上層図(調査区北側東西土層断面図)(1/80)

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構として、方形周溝墓6基、溝1本を検出した。6基の方形周溝墓はいずれも搅乱・削平を受けており、主体部や盛土は残っていない。

以下説明を加えていく。

#### 1号方形周溝墓（第5図・図版III）

（位置） 調査区中央より南側、建物境界線を回むような形で検出。

（形状・規模） 東辺の一部及び南辺は未検出であるが、北西コーナーにブリッジを残す。規模は $13.3 \times (13)$  m。

（溝の状況） 溝底は平坦で深さは西辺65cm、北辺46cmを測る。溝の堆積は3・5層でいずれも自然堆積と考えられる。

（出土遺物） 溝底から50cm上部で壺が1個体出土した（第11図・図版VII）

#### 2号方形周溝墓（第5図・図版IV）

（位置） 調査区北西隅に位置する。

（形状・規模） 南辺の一部及び南東コーナー以外は調査区外のため、詳細は不明。

（溝の状況） 溝は広く、最大で1.8m、深さは80cmを測る。溝底は平坦で、立ち上がりは内側では直壁に近く、外側ではなだらかである。

（出土遺物） 溝底より40cm上部で高坏が1個体分、覆土より高坏の破片が出土した（第11図・図版VII）。

#### 3号方形周溝墓（第6図・図版IV）

（位置） 調査区北側に位置する。

（形状・規模） 北辺を調査区外に持つため、ブリッジの存在は不明である。規模は $5 \times (5)$  m。

（溝の状況） 溝底は平坦で、西辺は浅い掘り方である。南東コーナーは土壙状に深い。

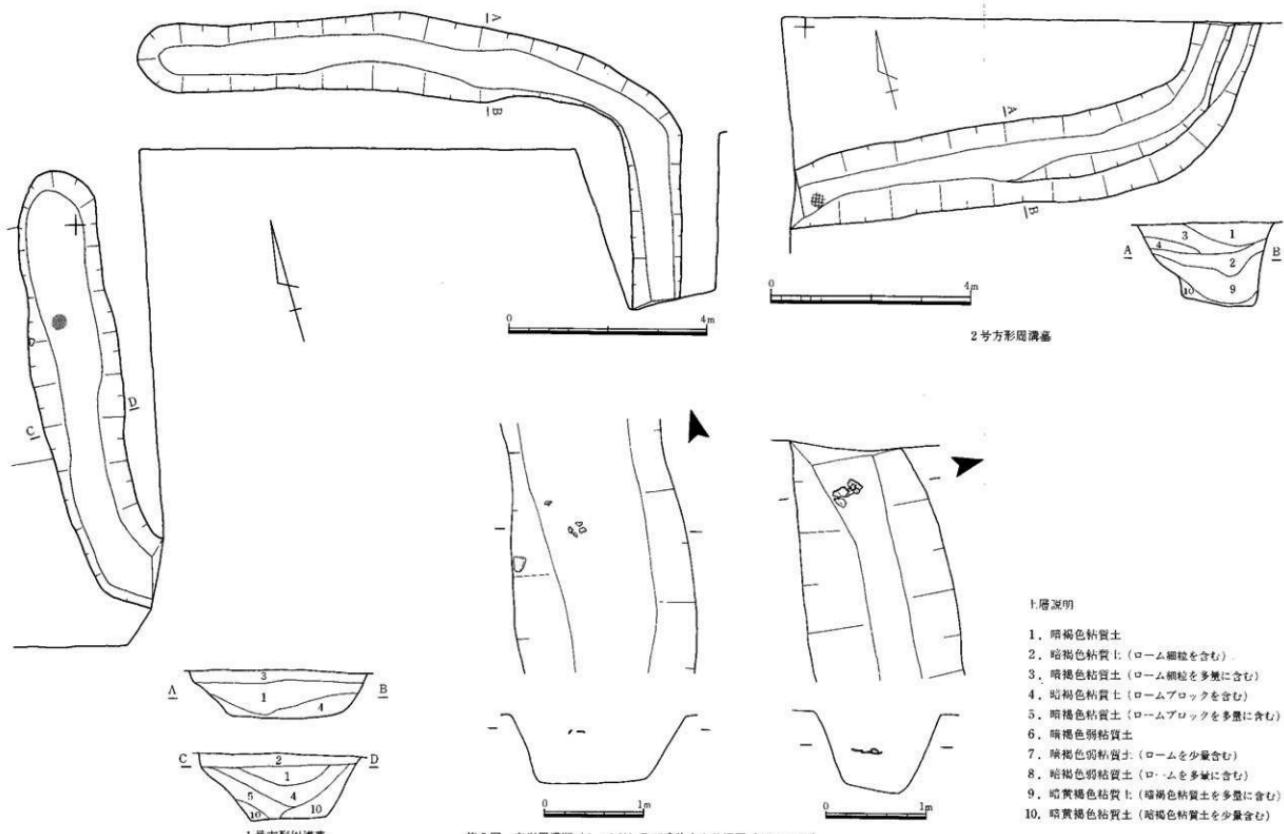
（出土遺物） 遺構に関係する出土遺物はないが、溝の南東コーナーより縄文早期末の鶴ヶ島台式の大型破片が出土した。

#### 4号方形周溝墓（第6図・図版V）

（位置） 調査区北側、3号方形周溝墓の東に位置する。

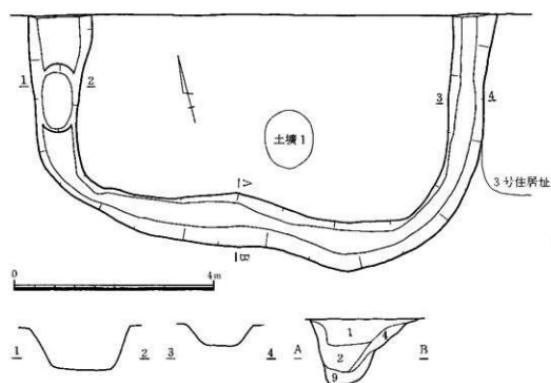
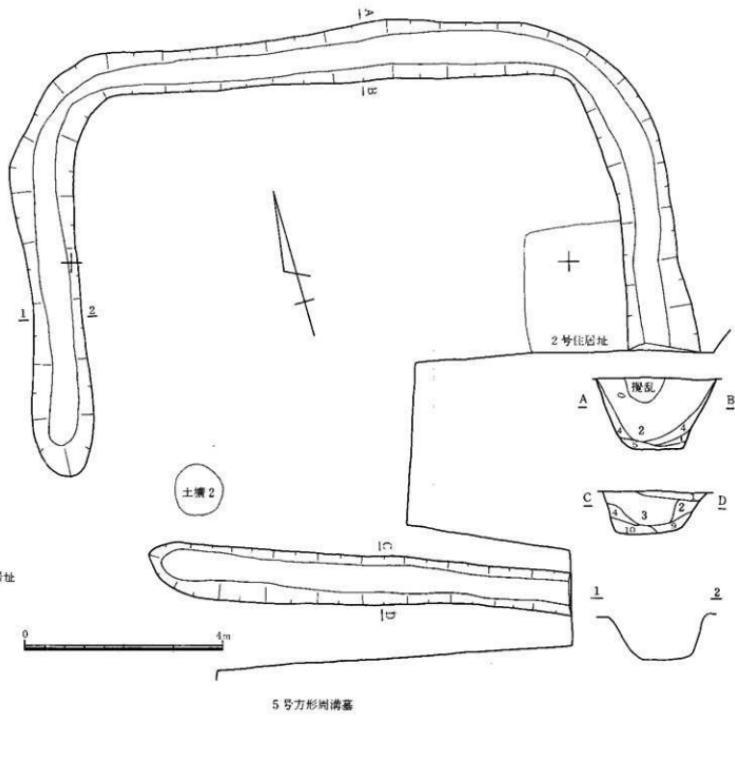
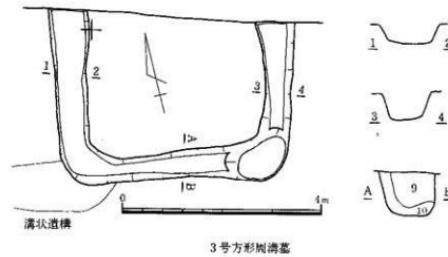
（形状・規模） 北辺は調査区外にあるため、ブリッジの有無は不明である。検出した全長は9.5mを測る。

（溝の状況） 溝の深さにはバラつきがあり、コーナー付近及び東辺は浅くなる。溝の堆積も

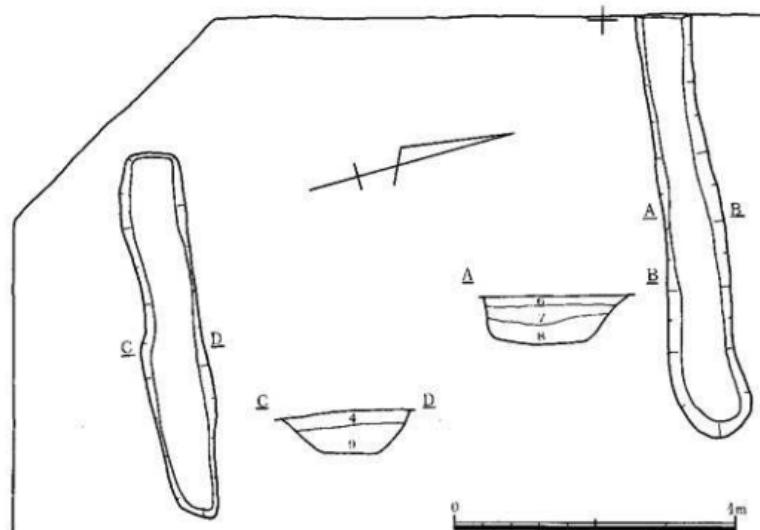


第5図 方形周溝墓（1・2分）及び出土物出土状況図（1/40・1/80）

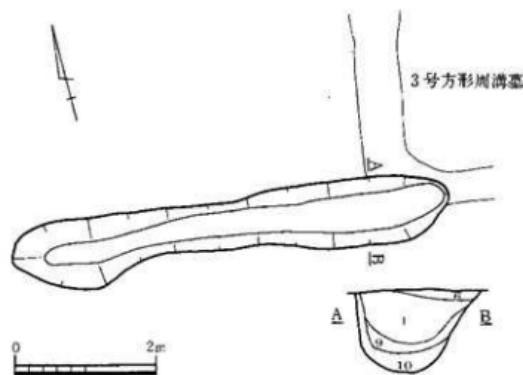
- I. 層説明
1. 暗褐色粘質土
  2. 細褐色粘質土（ローム細粒を含む）
  3. 細褐色粘質土（ローム網粒を多量に含む）
  4. 暗褐色粘質土（ロームブロックを含む）
  5. 細褐色粘質土（ロームブロックを多量に含む）
  6. 暗褐色弱粘質土
  7. 暗褐色弱粘質土（ロームを少量含む）
  8. 暗褐色弱粘質土（ロームを多量に含む）
  9. 暗褐色弱粘質土（暗褐色粘質土を少量含む）
  10. 暗褐色粘質土（暗褐色粘質土を少量含む）



第6図 方形創溝墓(3~5号)(1/40・1/80)



第7図 方形周溝墓(6号) [1/40・1/80]



第8図 溝状遺構 [1/40・1/80]

自然堆積であると思われる。

(出土遺物) なし。

#### 5号方形周溝墓 (第6図・図版III)

(位置) 調査区ほぼ中央に位置する。

(形状・規模) 南東コーナーは未検出であるが、南西にブリッジを残す。規模は $13.5 \times 12m$ である。

(溝の状況) 溝底は一様にして平坦で、深さは北辺で65cm、東西辺で50cm程度である。立ち上がりはやや直に近いが、外側はまだゆるやかである。

(出土遺物) 遺構に関係するものはない。溝の覆土より縄文土器の破片が比較的多く出土した。

#### 6号方形周溝墓 (第7図・図版V)

(位置) 調査区西側に位置する。

(形状・規模) 北辺と南辺の2本の溝を検出しただけで、他の溝は検出しえなかった。両溝間の長さは9.5mを測る。

(溝の状況) 溝底は平坦で浅い。立ち上がりもゆるやかである。堆積層も少なく堆積のしかたも一様である。

(出土遺物) なし。

#### 溝状遺構 (第8図・図版IV)

溝を1本検出した。3号方形周溝墓を切って東西に走る。全長6m、深さは60cm程度のしっかりした溝である。出土した遺物はない。これも方形周溝墓を構成する溝と思われるが、他の部分は検出しえなかった。

## 第2節 その他の遺構

住居址が3軒、土壙が2基、置石遺構が1基検出された。いずれも時期は不明である。

### 1) 竪穴住居址

#### 1号竪穴住居址 (第9図・図版VI)

C-1区に位置し、1号方形周溝墓の西辺に切られている。一辺4.8m程度の方形プランであると思われる。深さは30cm程度で、床面は平坦である。なお、柱穴・炉址は検出しえなかった。遺物も出土していない。

#### 2号竪穴住居址 (第9図・図版VI)

A・B-3・4区に位置し、5号方形周溝墓の東辺に切られる。平面形は方形を呈するが、規模は不明である。深さは10cm程度と浅く、柱穴・炉址等は検出できなかった。出土した遺物もない。



第9図 1号・2号・3号住居址 (1/60)

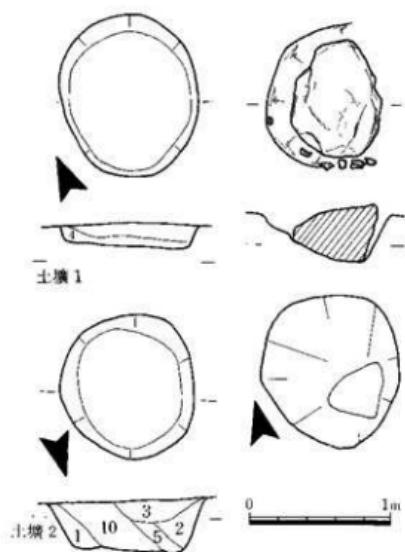
### 3号竪穴住居址 (第9図・図版VI)

A - 4区に位置し、4号方形周溝墓に切られている。平面形は方形を呈すると思われるが、規模は不明である。炉は梢円形を呈し、長径60cmほどを測る。断面はレンズ状を呈し浅かったが焼土が充填していた。炉址は住居址の中央付近と考えられるが、その周囲4.4m程は堅緻な貼床であった。柱穴は検出できなかった。

### 2) 土 壤

#### 1号土壤 (第10図・図版V)

A - 3・4区に位置する。平面形は梢円形を呈し、規模は100×110cmで深さは20cm程を測る。



第10図 土壌1・2、置石遺跡 [1/40]

れでいた。掘り方は石に比し僅かに大きいだけで土壌を意識したものとは考えられない。また遺跡付近は土層中に石がない地域であり、検出状況からみても意図的に埋め置かれたものであろう。

(堀ノ内)

### 第3節 出土遺物

#### 1) 弥生土器 (第11図・図版VI)

1～3は壺形土器。

1は底径6.5cm、残存器高18.5cmを測る。色調はやや黄色がかった褐色を呈し、胎土は雲母を含み極めて密である。外面はハケメ調整の後、丁寧にミガキを施しているが口縁部にまでは至っていない。内面は底部付近にハケメが残り、胴部はかなり粗い板ナデがみられる。口縁部には横方向の細かいミガキが施される。1号方形周溝墓から出土した。

2は口径6.0cm、底径5.9cm、器高7.4cmを測る。色調はやや暗褐色がかり、胎土は1mm程の石英、小砾を多く含む。調整は全面にヨコナデを施す。底部には焼成後穿孔がなされている。

A-3グリッド、遺構確認面から出土している。

3は小型品で残存する器高は4.3cmである。色調は暗褐色で胎土は密である。調整外面は丁寧な横方向のミガキ、内面はヨコナデである。表採品である。

断面形は逆台形を呈し、壠底はフラットであった。覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。遺物は出土していない。

#### 2号土壌 (第10図・図版III)

B-3区に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は径100cmを測り深さは40cm程度であった。断面形は逆台形を示し、壠底はゆるやかな凹凸がみられた。覆土は5層に分けられ、自然堆積を示す。覆土中から縄文土器が出土した。

土壌は上面をかなり削平されていることが予想され、その規模は本米かなり大きくなるであろう。時期的には、2号土壌は出土土器から縄文時代前期末から中期初頭と考えられ、1号土壌もほぼ同時期としたい。

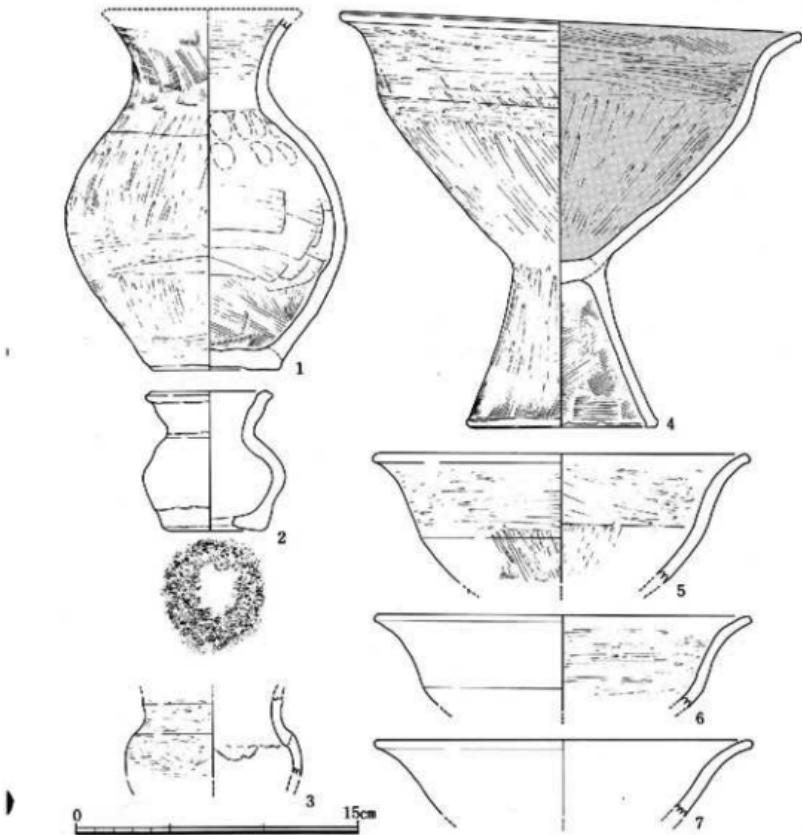
#### 3) 置石遺構 (第10図・図版IV)

A-3区に位置する。90×60cmで厚さ40cm程の石が、フラット面を上にして埋めら

れた。この石が、フラット面を上にして埋められた。また遺跡付近は土層中に石がない地域であり、検出状況からみても意図的に埋め置かれたものであ

ろう。

(堀ノ内)



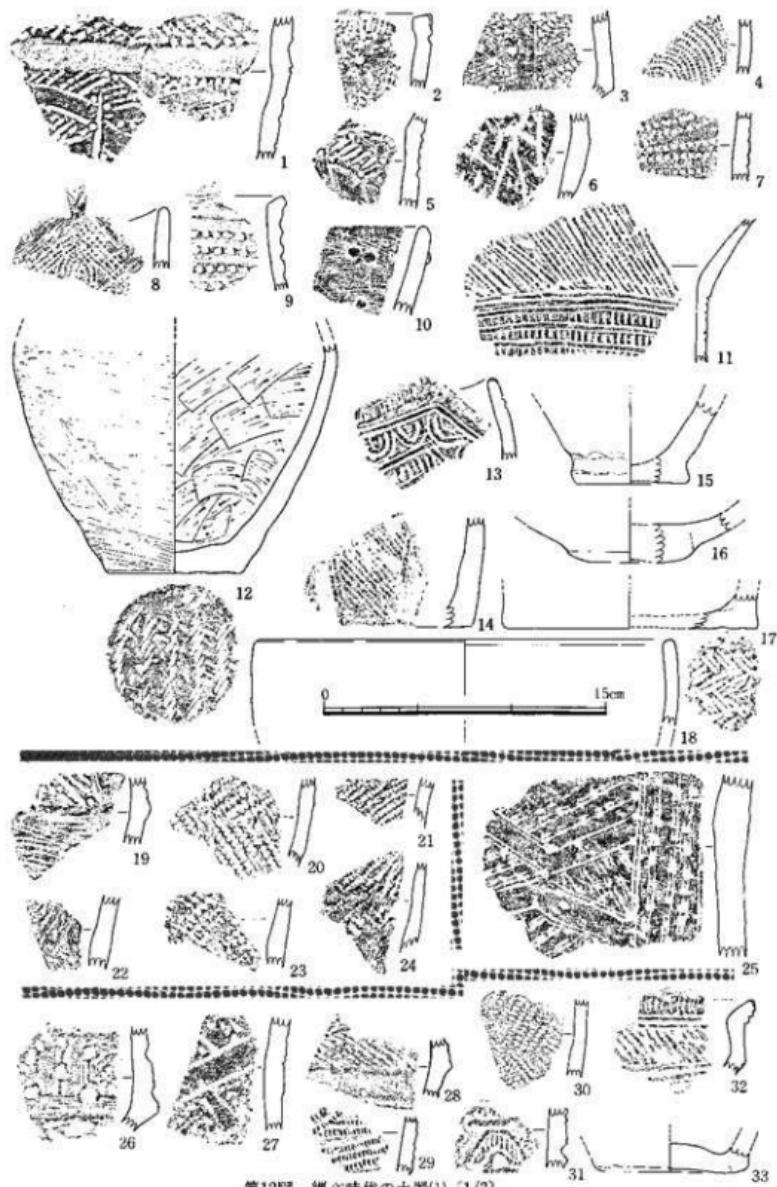
第11図 弥生時代の土器 (1/3)

4～7は高環形土器。

4は口径24.2cm、底径9.2cm、器高21.5cmを測る。色調は暗茶褐色。胎土はやや粗く、焼成もやや甘い。調整は全体的に丁寧である。外面脚部は縱方向、環部は斜一横方向のミガキで脚部に僅かにハケメが残る。内面もミガキを施すが、脚部は不定方向のハケメである。環部内面には赤色塗彩が部分的に残っている。2号方形周溝墓から出土している。

5～7はいずれも部分である。色調は5淡黄褐色、6・7暗褐色で、胎土はいずれも密だが焼成は6・7が甘い。調整はミガキだが7は不明瞭である。いずれも2号方形周溝墓、溝覆土から出土している。

(堀ノ内)



第12図 繩文時代の土器(1) (1/3)

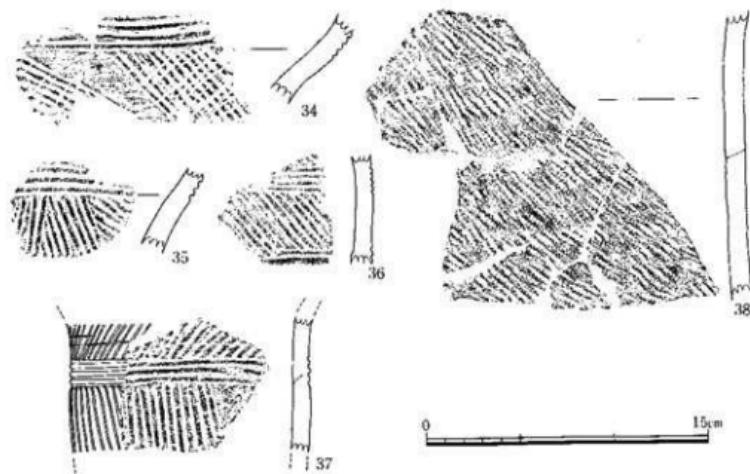
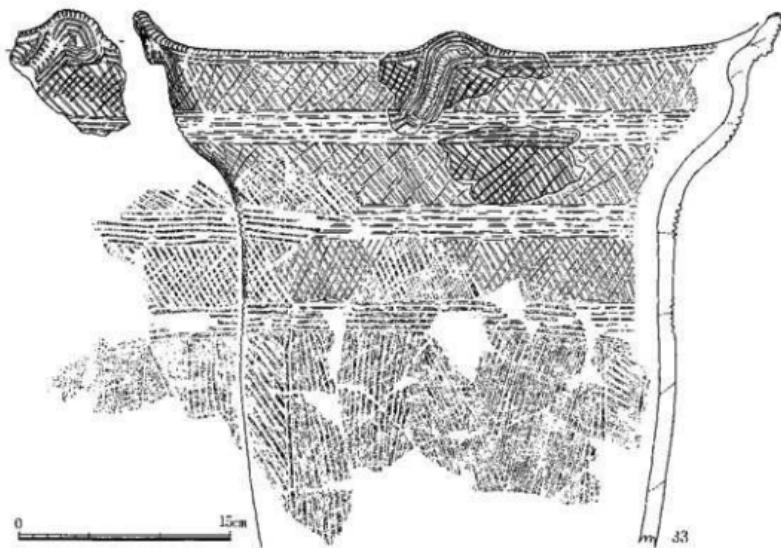
## 2) 繩文土器 (第12・13図・図版Ⅲ)

縄文土器の大半は遺構確認面または溝の覆土からの出土で、遺構に伴い出土したのは土壙2のものだけである。第12図の土器の出土地点は、1~18までが表採・遺構確認面、19から24が土壙2、25が3号方形周溝墓南北コーナーの落ち込み、26から33が5号方形周溝墓の溝内である。以下、特徴を述べる。

1、指でナデた帯の上に竹管または箆状工具で施文する。左下から右上への竹管による押し引きが主で、X字状の区画内にも押し引きされる。またX字状の区画の交点には、やはり竹管による刺突がされる。鶴ヶ島台式。2・3、箆によるX字に近い区画内を竹管の押し引きにより施文する。2は口唇に刻み目が入る。鶴ヶ島台式。4、半截竹管により螺旋状または同心円状に施文する。十三菩提式。5、棒状T具で四角形に沈線を入れ、4つの角に刺突を加える。鶴ヶ島台式。6、不規則な沈線のところどころに、列点状に刺突する。早期末~前期初めか。7、竹管による2条一組の押し引き施文。早期末か。8、直角に近い山形の口縁で、細い竹管により施文される。諸磯C式。9、口縁に4条以上の刻み目突帶文を持つ。東海系の入海式と思われる。10、かすかな条線の上に、ボタン状貼付文を持つ。諸磯C式。11、胴部は直であるが、口縁に近い所で逆八の字形に開く器形。箆による沈線が主で、胴部は縦の集合沈線に2条単位の横の沈線をかさねる。五領ヶ台式。12、外面は丁寧にミガキをかけ、反対に内面は粗いケズりで調整してある。底部に網代を残す。遺構確認面精査中出土。後期前半か。13、山形口縁で片方の口唇に刻み目がある。箆による半同心円等の沈線が施される。五領ヶ台式。14、U字状に区画された中を箆による沈線でうめる。底部。五領ヶ台式。15~17、時期不明の底部である。17は網代模を有する。18、無文の深鉢の口縁。時期不明。19、広く深い沈線を持ち、部分的に棒状T具により刺突を加えられる。下半は条線が主である。鶴ヶ島台式。20~24、縄文を地文とする上器片。このうち、20、23、24は羽状縄文である。前期初頭か。25、帯状にX字の区画をつくり、生じた三角形内を半截竹管により押し引く。これらの区画のための沈線も、半截竹管によるもの。胎土に纖維を多く含む。鶴ヶ島台式。26、「エ」字状に区画をつくり、その交点付近に大きめの刺突をする。区画穴は竹管の押し引きの施文が見られる。鶴ヶ島台式。27、沈線でできた区画内を、竹管により押し引く。鶴ヶ島台式。28、ナデによる帯を境に、竹管による押し引きが施される。鶴ヶ島台式。29、半截竹管により、帯状に施文される。十三菩提式。31・32、いずれも箆による沈線が主である。32は口唇に刻み目が入る。五領ヶ台式。

第13図の土器は、1号方形周溝墓南北コーナー覆土より一括して出土したものである。39は縄文を地文とする土器の大破片で、時期は不明、34から38は五領ヶ台式である。

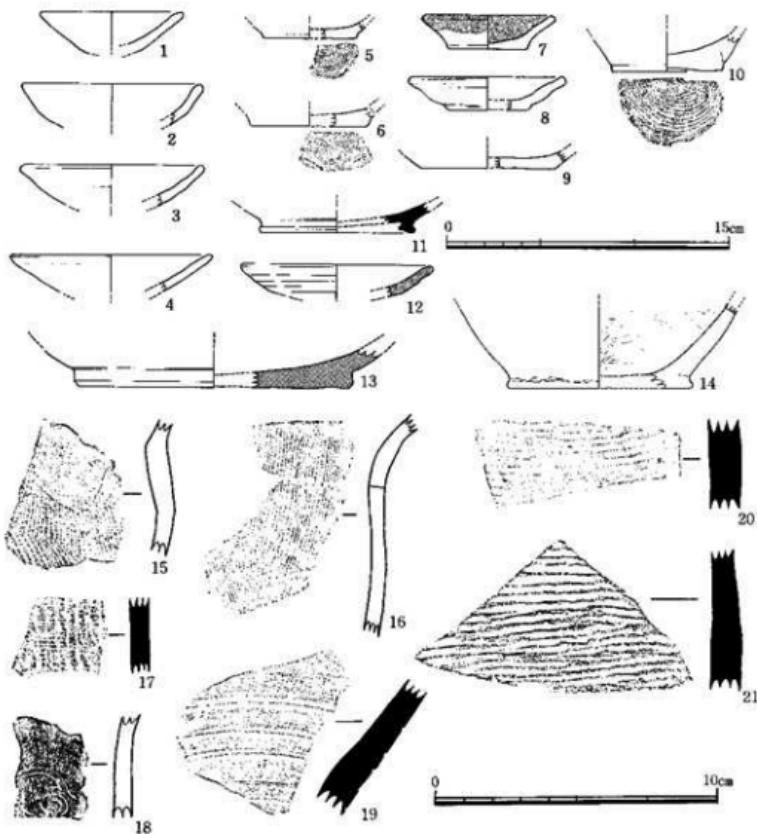
34は大型の深鉢で、5~6条単位の沈線を3本めぐらす。この沈線の帯の上はクロスした沈線で埋められるが、上部にいくほど不規則になる。口縁には、違うタイプの文様が計4単位入るものと思われる。口唇には刻み目が入れられる。胴部の沈線帯の下は上下方向の集合沈線が施される。35・36・37は異なる種類の沈線を持つ。35と37は沈線帯にはさまれた間にクロスさ



第13図 繩文時代の土器(2) (1/3・1/4)

せた沈線を入れるが、35は三角形の凹面向残している。36はこれらに対し、方向の違う集合沈線で埋めている。38は小型の深鉢で、4条の沈線帯の下はほぼ直に走る沈線を施す。この上には放射状に沈線を入れるが、僅かに横に走る。

(堀ノ内)



第14図 その他の時代の土器 [1/2・1/3]

### 3) その他の時代の土器 (第14図・図版VII)

これまで述べた以外に中世のものを主体とする土器が出土している。しかしその出土点数は少なく遺構に伴うものもない。

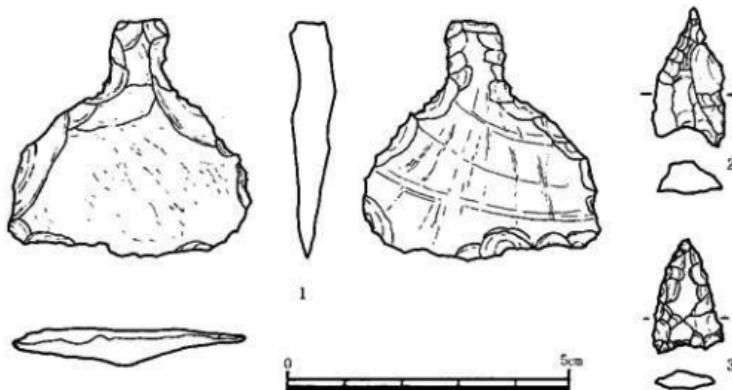
1～6・9は土師器の皿である。5、6、9には底部に糸切り痕が残る。色調は6が赤褐色で他は淡褐色を呈する。胎土はすべて密で、焼成も良好である。

7・8・10は土師質の土器である。7は内面にススが付着しており灯明皿であろう。色調は7・10が灰茶褐色～黒色、8は淡褐色を呈する。胎土はすべて密で7・8には金雲母が少量混入する。10は底部に糸切り痕が残り、8の底部内面には指頭圧痕が見られる。

11は張り付高台を有する須恵器の壺である。色調は明灰色、胎土は密だが、焼成はやや甘い。12・13は中世陶器である。12は瀬戸・美濃系統の陶器片で内外面に明茶褐色の釉が施される。小皿であろう。ロクロで成形され、胎土は密、焼成は極めて良好である。13は大型の皿で内面に濃緑色の釉が施され“メ”的痕跡がのこる。色調は暗赤茶褐色を呈する。胎土は白色微粒子を含み、密、焼成はやや甘い。

17・20・21は須恵器・甕の破片である。17は内面に青海波紋、外面は絡繩体のタキメで後カキメを施している。色調は20・21は灰白色、17は青灰色を呈する。胎土は3者とも密であるが、焼成は17がわずかに甘い。

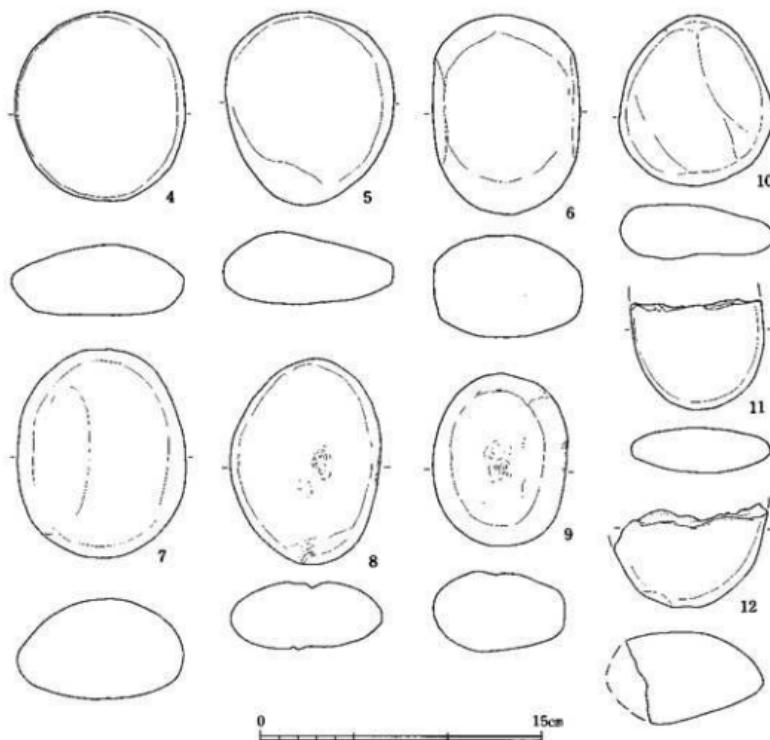
19は中世陶器のスリ鉢である。色調は黒色を呈し、胎土・焼成とも良好である。(堀之内)



### 4) 石 器 (第15～17図・図版VII)

1は横型石匙。刃部の調整は片面のみで、いわゆる粗製石匙である。石質はややホルンブックス化した泥質岩である。

2・3は石鎌。両者とも片面に自然面をかなり残している。共に黒曜石製である。



第16図 石器(2) (1/3)

4~12は磨石。5・7は安山岩製で他はすべて輝石安山岩製である。全体的に摩耗が少なく、5~7に目立つ程度である。8・9は凹石としても使用された。特に図示しなかったものは摩耗が極端に少ない。

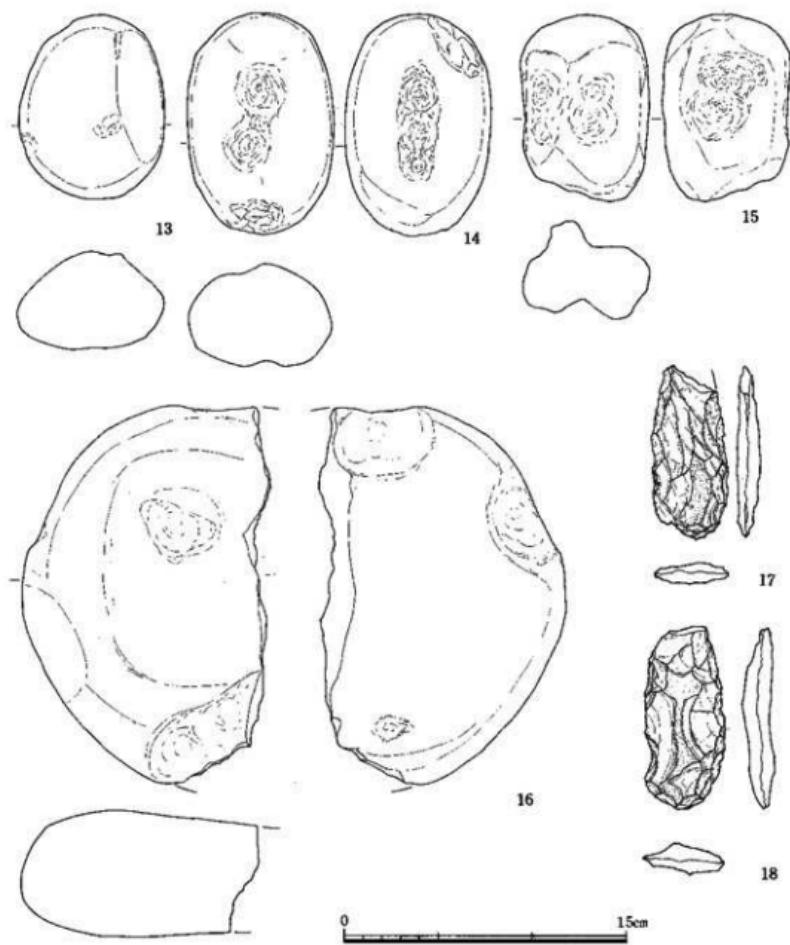
13~15は凹石としてあつかった。

13は磨石+凹石。凹部は僅かであるが周辺の摩耗は顕著である。14は凹石+磨石+敲石。片面に2ヶ所、他の面に1ヶ所凹部がある。周辺部に摩耗痕が残る。15は凹石。3面に凹部があり、使用痕が著しい。13は輝石安山岩製、14は角閃石岩山岩製、15は安山岩製である。

16は石皿。皿部は浅く、摩耗も少ない。凹部が1ヶ所残り凹石としての使用も考えられる。輝石安山岩製である。

17・18は打製石斧。両者とも短冊形石斧で粘板岩製である。

本遺跡からは図示したものも含めて29点の石器類が出土している。内訳は、打製石斧3点、



第17図 石器(3) (1/3)

石鉄 2 点、石匙 1 点、石皿 1 点、凹石 3 点、敲石 1 点、剥片(黒曜石) 3 点で、他はすべて磨石であった。磨石が 15 点と圧倒的に多く、全体の 50% 強を占める。さらに磨石としても使用されていた 2 点の凹石を含めると 17 点となり 58% をうわまわる。該期の遺構を伴っていない事もあり、断定的なことは言えないが本遺跡の一つの特徴であろう。

(標ノ内)

## 第V章 まとめ

今回の調査で得られた最も大きな成果は、曾根丘陵の南西端である三珠町で6基もの方形周溝墓が発見された事である。これまで町内で行われた発掘調査の際にも、方形周溝墓と考えられる溝状遺構が検出されている<sup>1</sup>が墓群として確認されたことは初めてである。

今回の調査では発掘区の関係もあり完掘されたものはないが、以下その概要をまとめたい。まず、規模であるが大型(13~14m)のもの2基【1・5号周溝墓】、中型(9~10m)のもの2基【4・6号周溝墓】、小型(5m程)のもの1基【3号周溝墓】であり、他の1基【2号周溝墓】も大型のものと考えられる。ブリッジの位置を確認できたものは2基のみで、南西コーナーのもの1基(5号)、北西コーナーのもの1基(1号)であるが他の2基(3・4号)も北西あるいは北東コーナーと考えられる。遺構の在り方からはさらに北へ延びていく様相を示しており、遺跡ののっている舌状台地全面が墓域であった可能性を示唆している。また分布関係を観察すると、大型の周溝墓の周間に中型、小型のものが位置し2号周溝墓を除くと台地の中央に大型のものが、周辺に中型、小型のものが造られた可能性が強い。

年代的には、周溝墓に伴う土器が少なく確定は難しいが2号周溝墓から出土した高坪型土器は甲西町住吉遺跡<sup>2</sup>出土のものと類似しており、ほぼ同じ年代を考えたい。また住吉遺跡出土の土器は東海地方の影響が指摘されている<sup>3</sup>ところでもあり本遺跡の系譜を考える上でも興味をもたれる。本遺跡から谷を隔てた位置に「城林遺跡<sup>4</sup>」が存在する。本遺跡に対応する集落跡とも考えられたが、出土している土器の様相に若干の違いが認められる。年代的には「城林遺跡」のものがやや新しいものと思われ、地域的な特徴にも様相の違いが認められる。したがって本遺跡に対応する集落跡は「城林遺跡」の他に存在するものと考えたい。

縄文時代の遺構としては、土壤2基が挙げられるが明確に時期を認定しうるものではない。

出土した土器を見ると、これまで町内では認められなかった早期末の鶴ヶ島台式や中期初頭の五領ヶ台式などが多く、逆に中期中葉から後期前葉にかけての土器が少ない。特に鶴ヶ島台式期のものは県内でも数少ない例である<sup>5</sup>。また五領ヶ台式期の土器は中道町上の平遺跡<sup>6</sup>から多く出土している。時期的には上の平遺跡のものがやや先行する<sup>7</sup>ようである。

一方石器類では、その組成中に磨石の占める割合が多い。遺構に伴うものではなく、年代的にも時期確定がなしうる資料ではないが、「応本遺跡」の特徴として押さえておきたい。

中世の遺構についても不確実であった。本来は中世の遺構(一条氏館跡)が期待された調査であったことは第II章の中でも述べた。館跡が調査区の北側に存在したか、南側にあったかは別として、唯一中世の遺構としては重石遺構が1ヶ所検出されたにすぎない。その性格、年代等は今後の類例を待つて検討したい。

ともあれ、弥生時代後期末の大規模な墓域を曾根丘陵の南端部でも確認できたことは今回の

調査の最大の収穫でもあり、三珠町だけではなく山梨県内における弥生時代末から古墳時代への移行過程や地域的特性を検討するうえで重要な資料を提供したものといえよう。

また縄文早期、鶴ヶ島台式期土器の検出等、縄文時代の遺物においてもこれまでの時代的、地域的資料の空白を埋めるものとして貴重な資料となろう。

今回の報告では、周溝墓群の内容分析、周溝墓群をめぐる集落跡の問題、などに言及しえなかった。また最近、類例が増加しつつある県内の周溝墓との比較（特に上の平遺跡方形周溝墓群<sup>9</sup>との比較）、前期占墳との系統的検討など多くの課題が今後にこされている。これらの課題を果たしつつ、三珠町の地域的、歴史的特性を探るとともに、山梨県内に於ける歴史的位置を明らかにしていきたい。

（堀ノ内・清水）

#### 註

- 1) 一城林遺跡（註4参照）ではほぼ90°の角度をなす、2本の溝が検出されている。これらが周溝状をなすか否かは発掘区外のため不明である。
- 2) 新津 健他 1981 『佐吉遺跡』 半西町教育委員会
- 3) 白居直之氏のご教示による。
- 4) 森 和敏 1981 『一城林遺跡』 山梨県教育委員会
- 5) 榎原功一氏のご教示による。
- 6) 中山誠二 1987 『上の平遺跡』 山梨県教育委員会
- 7) 中山誠二氏のご教示による。
- 8) 山梨県教育委員会 1986 『山梨県の中世城館跡』 山梨県教育委員会
- 9) 小林広和 1980 『上の平』 山梨県教育委員会

#### 参考文献

- 『三珠町誌』 三珠町教育委員会  
『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』 1988 愛知考古学講話会

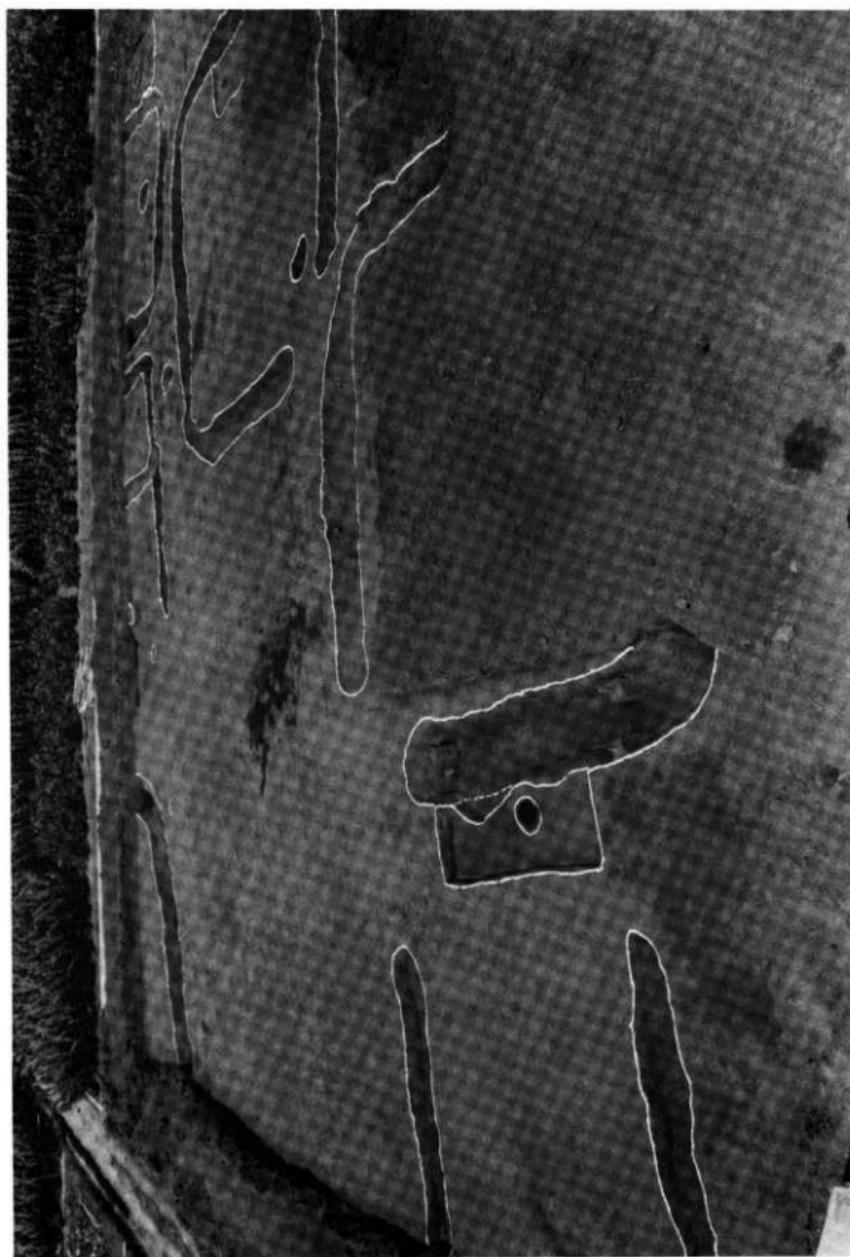


遺跡遠景（北方より）

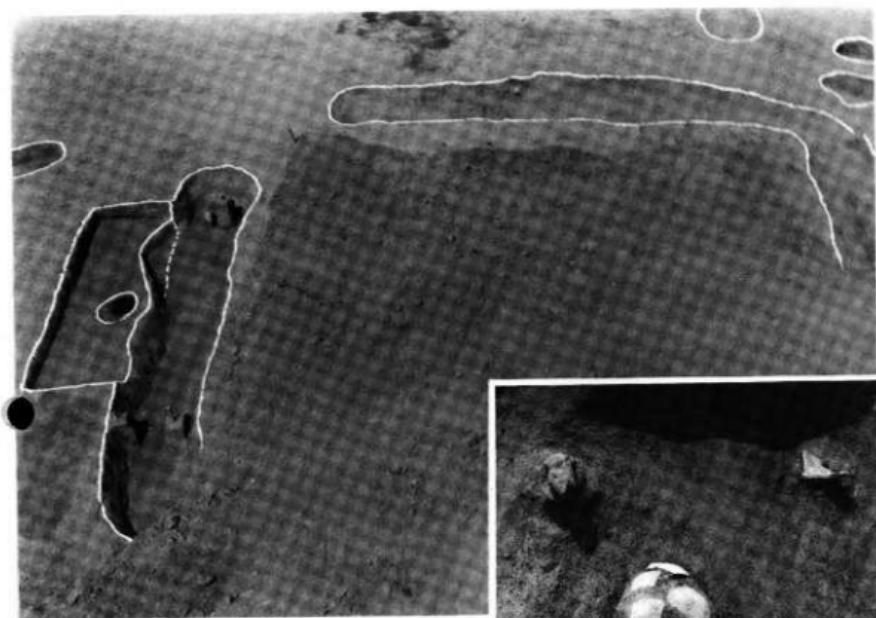


調査参加者

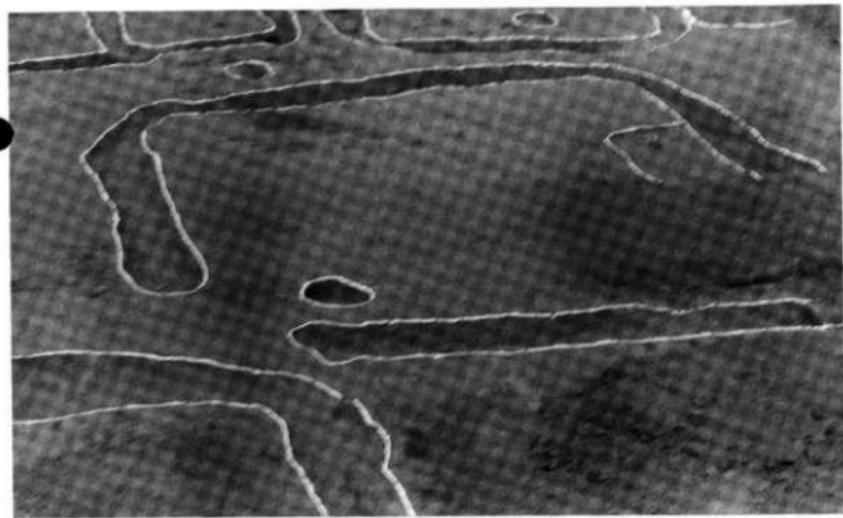
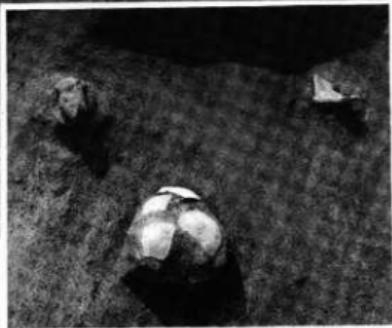
図版 II



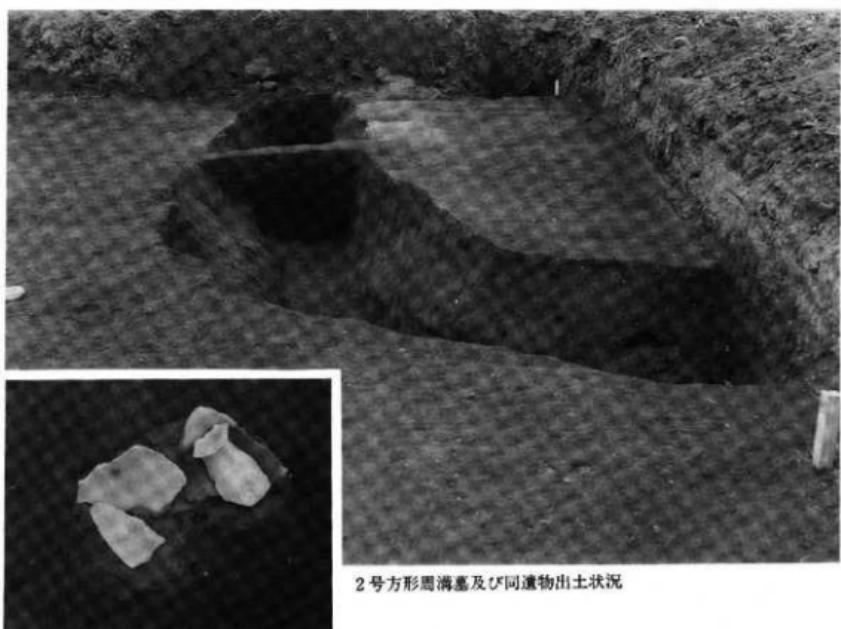
道跡全景（南より）



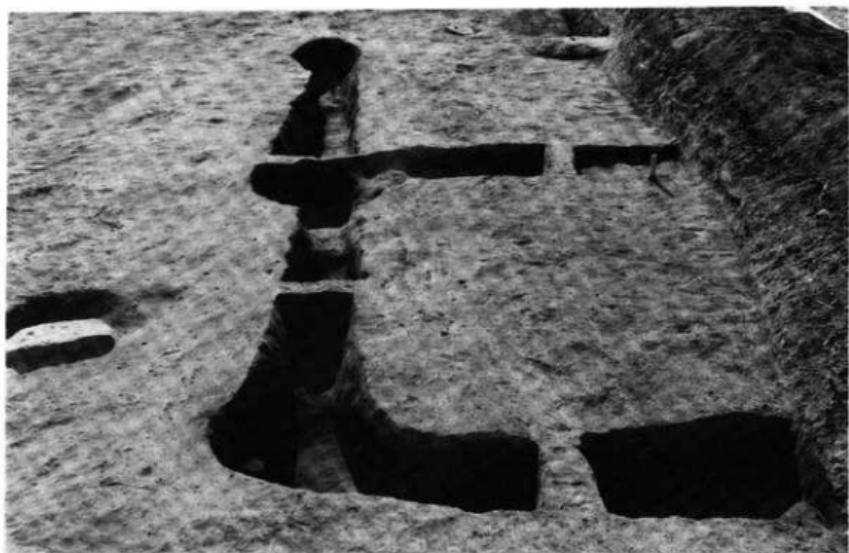
1号方形周溝墓及び同遺物出土状況



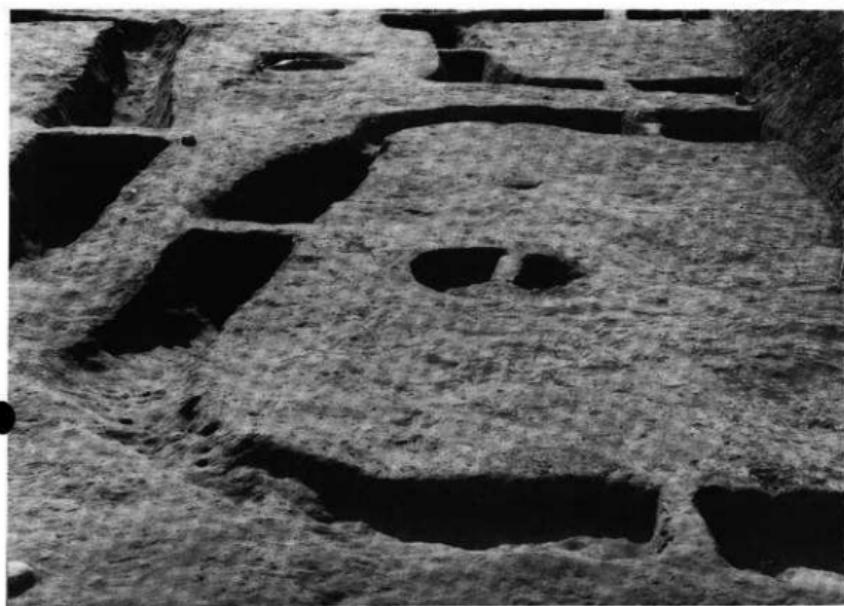
5号方形周溝墓及び土塙 2



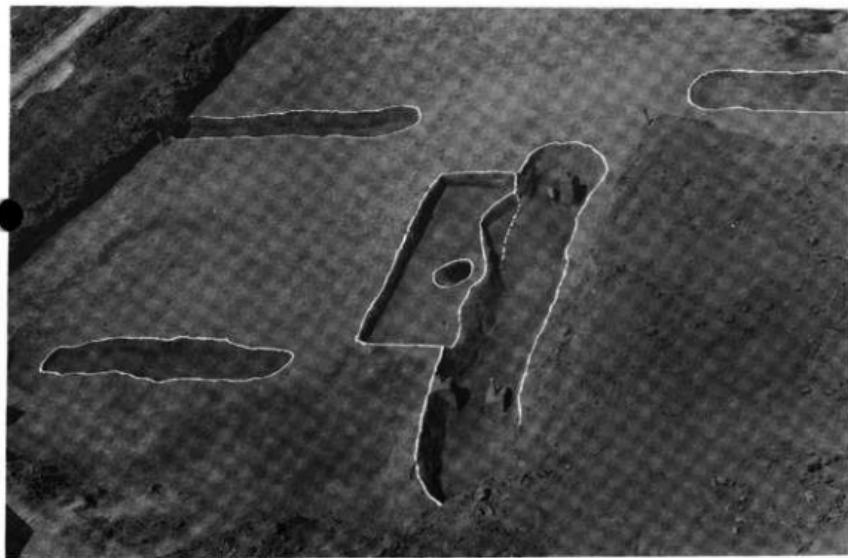
2号方形周溝墓及び同遺物出土状況



3号方形周溝墓・溝状遺構及び置石遺構



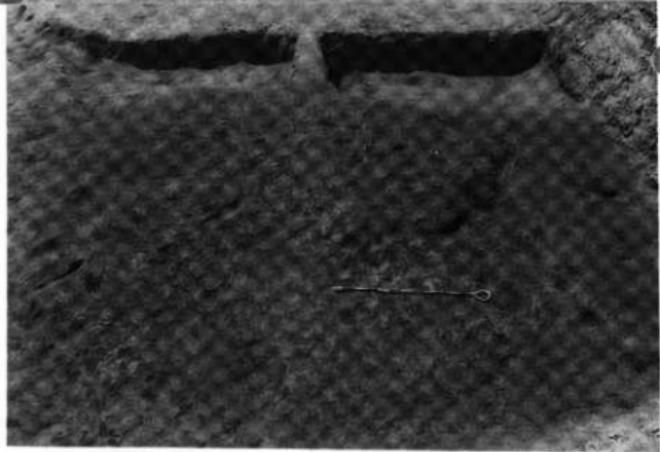
4号方形窓溝墓・土塘 1



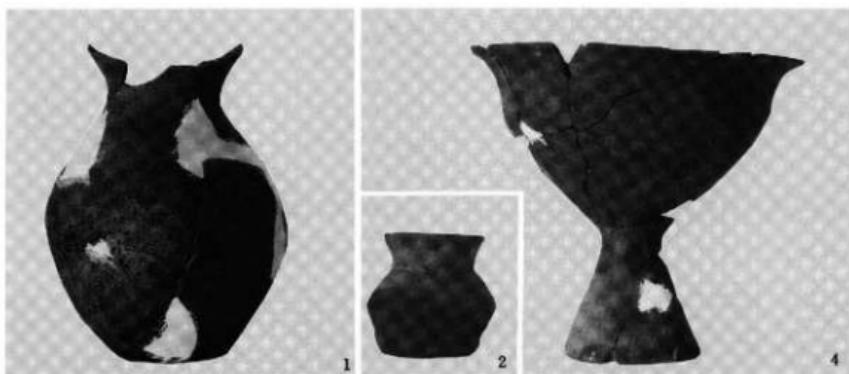
6号方形窓溝墓・1号住居址



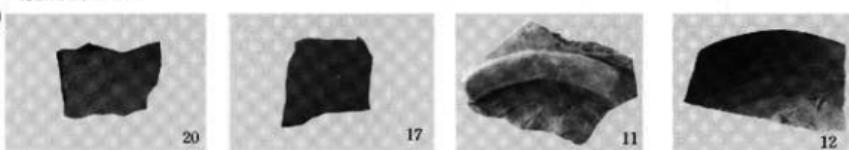
1号住居址(?)  
2号住居址伴



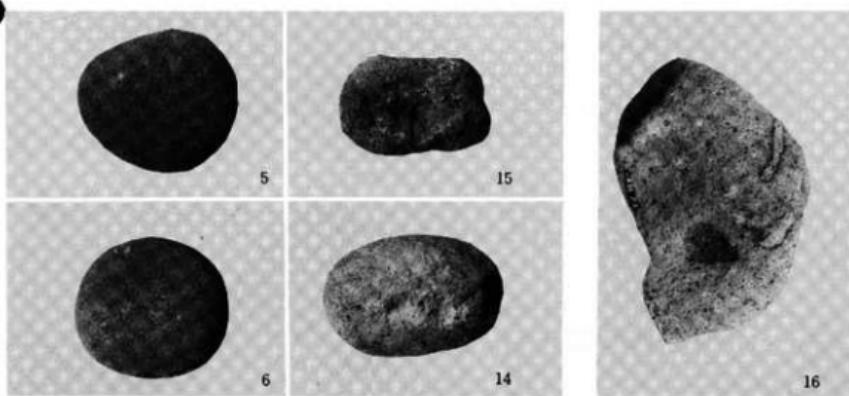
3号住居址



弥生時代の土器

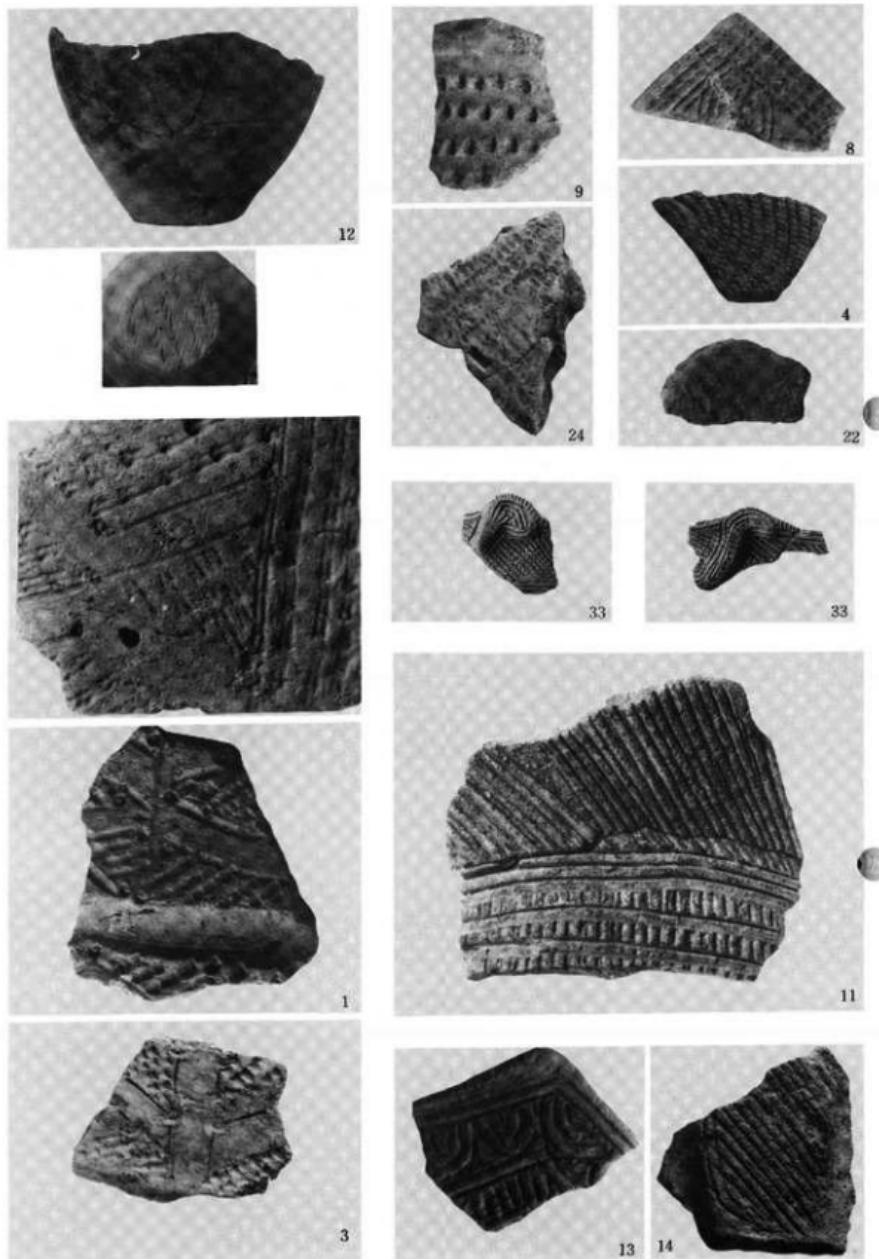


その他の時代の土器



石器

図版 VIII





遺跡全景（三珠町民文化資料館）

## 一条氏館跡遺跡

---

—山梨県西八代郡三珠町一条氏館跡遺跡発掘調査報告書—

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 三珠町教育委員会

印 刷 ほ お す き 書 繕 横

---

